2　東京府病院長としての長谷川泰

唐沢信安

長谷川泰は済生学舎創立直後の明治九年五月より東京府病院院長に就任している。当時多くの伝染病が長崎港及び横浜港より侵入し、更に西南戦争によりコレラの大流行を来し、泰は「避病院」の病長をも兼任し、昼夜その防疫に苦しんでいる。

以下済生学舎の教育以外に、東京府病院長としての社会的貢献について述べてみたい。

㈠　東京府病院の由来

東京府病院の設立の由来は、泰の師の佐藤尚中が、大学東校の校長時代に、「官立の大学東校の病院は、東京府の一般庶民の医療施設としての役割を果していない」との理由を宮内省に明治五年に建白書を以て申し出ている。そこで、明治七年五月七日に宮内省は、東京府に一万円の御下賜金を出され、港区愛宕町二丁目八番地（現・東京慈恵会医科大学敷地）に東京府病院を設立させ、東京府の庶民の救済病院として活動を開始せしめた。

また、お雇い外国人として、明治八年にマーニング（外科医・英国人）と、明治十年からブーケマ（内科医・和蘭人）の二人が協力した。泰の門下生の山崎元脩準医学士は副院長として泰を補佐し、「医学生」の教育と、「産婆養成所」を創設し、多くの医術開業試験の合検者と、産婆の免許資格者を育成した。

また種痘の実施と、貧困者の無料入院、手当等数多くの東京府住民の為の医療に尽力している。

長谷川泰の院長就任は三代目で、初代は尚中門下の岩佐純で、佐々木東洋が補佐し、二代目院長は坪井信良であった。

㈡　区医制度と貧困者の救済制度

泰の師の尚中は、長年医療の本質は「貧困者の医学的救済」であるとの念願を持っていた。泰が東京府の病院長となるや、泰と尚中は協議して、その実現のために、東京府を十七の医療制度上の小区に分け、「区医制度」を

新たに設けた。

各区に区医を一名ずつ置き、泰自ら貧困者のための無料の診察券を図案化して配付し、種痘及診療を行った。

その協力者の区医の中には、隈川宗悦・松山棟庵・太田雄寧・石井信義・佐々木東洞等の名医が加わっていた。

中枢となったのは東京府病院（愛宕町二丁目・長谷川泰院長）及び第一分局（馬喰町四丁目・牧山脩郷分局長）第二分局（深川西平野町・小林恒分局長）及び順天堂病院（湯島五丁目・佐藤尚中院長・佐藤進副院長）の四病院であった。

この貧困者の救済制度の基は、米国コロンビア州衛生局萃盛頓府の一八七四年に作られた「米国萃盛頓府に於て区医に告諭文示」を翻訳して実行したものである。

その中に「貧困者ありて、足下に来診を乞う時は速に往診施療をしなさい」と記してある。長谷川泰は右の原文を何度も書き改めて、東京府の「区医職務心得」として記録を残している。参考までに一部を記載する。

第一條

区医は済恤（あわれみの心）の趣旨を体認せしめ、其受持区内貧困者の治療及其種痘を担任し、予防の法を施行し、以て東京府病院並に其分局の欠を補う可き事。

第二條

東京府施療券を持てきたるものは、懇切に之を診察し、施療処方箋に薬方を記し、自己の印を捺し、以て東京府施療調薬所に至らしむ可き事。（以下略）

右のような医療制度は、一般開業医の生活をおびやかすものとして、明治十年六月八日付で、青木弼・押田俊二・三浦克造・竹内三嗣・揚井謙三の五名の連名で東京府知事に反対の建白書も出されている。

理想を求めた泰の東京府病院は、施療病院となり、一般患者の診察は明治十三年七月より廃止したが、西南戦争後のインフレで、東京府は財政悪化し、明治十四年七月閉鎖された。（後に高木兼寛により東京慈恵医院となる）

（日本医科大学）